

教育応援誌

けいこく

知徳一体の啓発教育をめざして

No.165

令和3年 12月1日

- ✳ 未来へ 夢をつないで 菊山紀彦
- ✳ 学校で学び、学校で教える 徳川文武
- ✳ コロナ時代に師として継承すべきこと 近藤北濤
- ✳ 私が「わたし」に出会う
「場」づくりで支える、ライフ・キャリア支援 木下城康
- ✳ 明るく、楽しく、
前向きに生きる力の育成 長澤勇哉
- ✳ 学校のちょっといい話 鍵山智子
- ✳ 対談シリーズ ①「響育」 安田美晴・諫山佳子

おばあちゃんの雑巾

エッセイスト 吉田 悦花

私が小学校に入学する少し前、新居に祖父
母が引っ越してきた。父母と弟と私の四人家
族に、祖父母が加わって同じ屋根の下に六人
が暮らすことになった。

ある日、ベテランの担任教師の根本先生が
教室のみんなに話しかけた。
「今日、吉田さんのおばあさまが、届けてくだ
さいました。」

配られたのは、ちくちくと細かく赤や緑の
あざやかな糸でふちどられた真っ白な雑巾だっ
た。祖母は、孫の私と同じ学級の新一年生全
員に雑巾を縫って贈ったのである。

ひとクラス分の雑巾を縫い上げた祖母は、
それを風呂敷に包み、孫が通う小学校の職員
室を訪れ、担任に「うちの孫をよろしくお願
いします」と挨拶したのだろうか。私はもちろん、同居
している家族も、まったく知らなかった。

「二枚一枚、みんなのことを思っ
て縫ってくださいました。お礼
のお手紙を書きましよう」と根
本先生は呼びかけた。みんな、
素直に、そして熱心に原稿用紙
に向かった。
私は、なんで雑巾なんだろう、
とひとり思った。なんとなく恥
ずかしくて、どこか無関心を装っ



ていた。

それから十五年後、祖母は九十三歳で、自宅で亡くなっ
た。しばらくして、祖母の古筆筒の抽斗ひきだしから原稿用紙の
束が入った分厚い封筒が見つかった。私の同級生の小学
一年生が、祖母へ贈った手紙である。

お礼の言葉が、ひらがなで丹念に綴られていた。その
中に、「とてもきれいな雑巾なので、床掃除には使わない
で、給食の前、机の上を拭くのに使いますよう、とみん
なで話し合って決めました」という一文もあった。

みんな一所懸命、感謝を述べているのに、私自身が、
祖母にちゃんと雑巾のお礼を言っていなかったことに気
づかされた。

父は、祖母が四十五歳のときに誕生した末っ子の跡取
り息子である。祖父母は、八十近くになって父のもとへ
越してきた。

気骨ある明治女性であった祖母は、知的好奇心も旺盛
で、これまでの田園地帯とは異なる、都心に暮らすこと
に、不安よりも期待のほうが大きかったに違いない。

小学校に入学したばかりの私はもちろん、クラスメイ
トが、みんな明るく元気に仲良く成長してほしいと、ひ
と針ひと針願いを込めたのだろう。微笑む祖母と背中
のまるみを思い浮かべると、ぐっとこみ上げるものがある。

(NPO法人神田雑学大学最高顧問)

「おもしろ俳句」対談

[https://www.morality-jp/educatorseminar/
moral-education/](https://www.morality-jp/educatorseminar/moral-education/)

